



慶應言語学
コロキウム

慶應義塾大学言語文化研究所
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

Functional Parametrization Hypothesis in the Minimalist Program

講師：小林 亮一郎 氏(東京農業大学)

司会・コメンテーター：内堀 朝子氏(東京大学)、北原 久嗣(慶應義塾大学)

日時：2022年4月23日(土) 10:00-17:00

※オンライン開催(Zoom 使用)、受講料無料

本発表では、「機能範疇パラメータ化の仮説」(Functional Parametrization Hypothesis: Fukui 1988, 1990, 1995 他)の一部である、「機能範疇における一致素性の有無が、言語間のパラメトリックな差異をもたらす」という主張を支持することを目指す。いくつかのケーススタディと比較統辞論の観点からの議論により、日本語にはレキシコンの中に[uφ] (不与値の人称、数、性(φ)素性)が存在しないことを示す。

前半では、言語理論の中で「機能範疇パラメータ化の仮説」がどのように登場したのかを確認し、人間言語の研究に関するさまざまなアプローチ(言語獲得と言語障害)の代表的な先行研究について検討をする。そして、語彙範疇とは対照的に、機能範疇にパラメトリックな差異が存在することは自然であると主張する。さらに、機能範疇に載っている一致素性も差異の対象となることは自然なことであると主張する。これは、言語間のバリエーションが PF インターフェイスにのみ起因するという、強い意味での「外在化仮説」(Externalization Hypothesis: Boeckx 2016 他)とは相容れない。

次に Chomsky (2013)の枠組みにおいて、日本語のよく知られた、一見ラベル付けできないように見えるいくつかの構文が、問題なくラベル付けされる方法について、分析を提案する。本提案の下で Chomsky (2013)の{XP, YP}問題を解決することで、日本語の一般的な文、多重主格/属格構文、(多重)かきませ構文が、すべてラベル付けの問題なしに派生できることを示す。さらに、[uφ]を持つ言語である英語では、これらの構文を派生することができないことを説明する。

後半では、動詞-目的語の φ 素性一致が存在する言語において、生産的な語彙的複合動詞が派生できないという一般化を提案する。そして、英語をはじめとする動詞-目的語の φ 素性一致が存在するいくつかの言語において、なぜ生産的な語彙的複合動詞が存在しないのかを形態統辞論的に分析する。日本語、韓国語、モンゴル語などでは[uφ]がないため、語彙的複合動詞が豊かに存在する。一方、英語やドイツ語のように目的語-動詞の φ 素性一致がある言語では、このような複合語は観察されない。さらに、φ-agreement を持たない日本語では、格素性がどのように認可されるのかについて論じる。

次に、「日本語に φ 一致現象が存在する」と主張する先行研究に関する、広範な議論を行う。5つの主張について丁寧に検討し、その後、それぞれに対して反論を行う。日本語には φ 一致現象の実質的な証拠がほとんどないことを示し、日本語には[uφ]がないという主張をさらに支持する。

全体として、日本語には語彙の中に[uφ]がないこと、そしてレキシコンの中的一致素性の有無が、本発表において探求するいくつかのパラメトリックな差異をもたらすことを主張する。本発表は、全体として「外在化仮説」に対する反論を提供することになる。

[参加申込] genbu@icl.keio.ac.jp 申込締切: 4月21日(木)

- ・氏名、所属、職位(学部・専攻・学年)を明記の上、メールでお申込ください。
- ・申込者へは、事務局より別途オンライン開催情報を返信いたします。

主催 慶應義塾大学言語文化研究所

[お問い合わせ先]

〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所
電話：03-5427-1595(事務室直通) メール：genbu@icl.keio.ac.jp
<http://www.icl.keio.ac.jp>